

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02351

研究課題名(和文) CEFRを日本語に適用するための尺度構成理論を中心とした基礎研究

研究課題名(英文) Fundamental research based on scaling theory for applying CEFR to Japanese language

研究代表者

野口 裕之(Noguchi, Hiroyuki)

名古屋大学・教育発達科学研究科・名誉教授

研究者番号：60114815

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はCEFR(欧州言語共通参照枠)の日本語教育への適用可能性について検討した。まず、海外のテスト開発機関および外国語教育機関で専門家に聴き取り調査を実施したところ、CEFRをそのまま日本語に適用しているところはなかった。次に、CEFRが設定する、聞く、読む、話す、書く、やりとり、各言語活動の能力記述文を基本に、学習者が具体的な言語活動を「できる」程度を自己評価する調査票を開発し、海外および国内で母語に配慮して学習者に調査を実施した。その結果、CEFRを日本語教育で活用するには、能力記述文に関して、レベルの変更や日本語の独自性を反映するものを加える等の調整・補足する必要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語教育界ではCEFRを参照枠に用いる試みが最近多く見られる。CEFRを汎言語的な参照枠とする見方もあるが、実証研究は見られない。North(2014)は、非ラテン系文字言語とアルファベット言語とで文書を「読む」処理方略が異なるとしている。

本研究は、日本語学習者調査データを基にCEFRの言語能力記述文をIRT尺度化し、難易度の順序性を元のCEFRと比較して、日本語の独自性を量的研究で炙り出し、欧州域外で汎言語性の成立に疑問を示した点に学術的意義があり、日本語の独自性に対応する変更・調整により、CEFRの理念に則りつつ、日本語教育に適合した参照枠を示唆する社会的意義のある成果が得られた。

研究成果の概要(英文)：This study examined the applicability of CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) to Japanese language education. First, we interviewed experts at overseas test development organizations and foreign language education institutions, and found that none of them had applied the CEFR to Japanese as is. Next, we developed a questionnaire to assess the level of proficiency of Japanese language learners to perform specific language activities, based on the language proficiency descriptors of the CEFR's listening, reading, speaking, writing, and interaction activities, then conducted a survey of learners in Japan and overseas in consideration of their native language. As a result, it became clear that in order to use CEFR in Japanese language education, it is necessary to adjust and supplement the language proficiency descriptors, such as changing the level.

研究分野：人文系 日本語教育 大規模言語テスト分析理論

キーワード：CEFR 非欧州言語へのCEFR適用可能性 能力記述文の順序性 日本語の独自性 漢字運用能力 Can-do statements 学習課程対応 Can-do statements 項目応答理論 Rasch系モデル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初、日本語教育の学界・教育界では欧州言語共通参照枠と訳される CEFR(Common European Framework of Reference for Languages、Learning、teaching、assessment)が注目され、言語行動の能力記述文 (Can-do statements) を日本語教育の枠組や実際の教育場面に取り入れようとする潮流があった。

(2) しかしながら、日本語が欧州域内の言語と異なる点、特に表意文字の漢字と表音文字のひらがな・カタカナとが混在して使用され、漢字が語彙に大きく影響している点をはじめ、日本語の独自性に関して十分検討し配慮する必要があったが、この点に関してはあまり検討されることがなかった。

(3) 一方で、東南アジアを始めとして漢字の習得が学習課題となる非漢字圏学習者が増加傾向にあり、特に日本国内在留者の学習、進学、就職などの社会参加に鑑みて、日本語教育を充実させることが喫緊の課題であった。特に CEFR を日本語教育に取り入れる際には、表記等に留意しながら、6つのレベル、及び、各レベルに配置された能力記述文(Can-do statements)がそのまま適用可能か、補助尺度が必要か、欧州諸言語のように CEFR のレベルと個別言語での語彙・文法等の具体的使用実態とを関連付けた RLDs(reference language descriptors)で対応可能か、など多くの検討課題があった。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究では、目標言語が欧州域外の言語である日本語の場合に、日本語の独自性に照らして、① CEFR の言語能力記述文が社会文化的な状況が欧州と異なる日本語環境における言語活動を十分にカバーしているか、② CEFR の言語能力記述文のレベル配置や難易度の順序性がそのまま日本語に適用できるか、という CEFR 尺度の日本語に対する有効性と限界について明らかにすることを第一の目的とした。

(2) また、CEFR ではカバーしていない言語活動に関して、① 言語能力記述文を開発して、それを CEFR に入れ込むのか、② 独立尺度として提案するのか、③ 欧州域内の言語でも開発されている CEFR のレベルと個別言語での語彙・文法等の具体的使用実態とを関連付けた RLDs(reference language descriptors)で対応可能かについて検討する必要があるが、特に①および②について提案することを第2の目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 【聴き取り調査(2017年度)】 欧州域内外の言語教育機関や言語テスト開発機関において、外国語教育の目標言語が日本語の場合に、CEFR を適用する際に日本語の独自性をどのように扱っているのか、具体的方法について聴き取り調査を実施する。中国では、目標言語が中国語の場合についても調査する。

(2) 【第1次調査(2018年度)】 CEFR の日本語に対する有効性を検証する。そのために ① CEFR の言語能力記述文を基に項目が構成された調査(質問)票を調査協力者毎に配布して、② 各質問項目の言語行動が日本語を用いてできるか否かを、自己評価して回答を記入するように教示した。③ この調査では、「聞く」「読む」に関する70項目に対して4段階評定尺度で回答を得た。なお、CEFR-CV(2018)で改訂された文言や記述(例えば、「母語話者」という表現が用いられなくなった)に関して修正するとともに、日本語学習者に「自己評価」を求めることに配慮して、日本語版では CEFR の言語能力記述文の文意を損なわない範囲で具体的で分かりやすく修正し、自己評価するポイントを明確にする、など若干の修正を加えた。④ 調査票は、英語版、中国語(簡体字)版、ベトナム語版、日本語版の4種類を用意した。⑤ 調査実施地は、漢字圏(中国)、非漢字圏アジア(ベトナム)、非漢字圏非アジア(オーストラリア、米国)および日本国内で、2018年10月から2019年1月にかけて実施した。全部で557名の回答が得られた。⑥ 分析には、IRTの段階応答モデル(Graded Response Model)を適用するが、識別力パラメータに等値制約をおいて、カテゴリ境界特性曲線(Boundary Characteristic Curve: BCC)の位置を表わすパラメータの平均値を項目の困難度とした。⑦ 「聞く」「読む」各項目の困難度と、当該項目が CEFR でどのレベルに位置づけられているかを検討し、「聞く」に関しては、North(2000)の言語能力記述文のロジット値と順序性を比較する。

(3) 【第2次調査(2019年度)】 第1次調査と基本的な方法に変わりがないが、① この調査では「話す」「書く」「やりとり」238項目から99項目を抽出し、A版(50項目)、B版(49項目)、C版(48項目)の3版を構成し実施した。これらは3版間共通の項目と版毎の独自項目とから構成され、99項目が等化された尺度上に並べられるように工夫した。② 調査票は、英語版、中国語(簡体字)版、ベトナム語版、日本語版の4種類を用意した。③ 調査実施地は、漢字圏(中国)、非漢字圏アジア(ベトナム、インド)、非漢字圏非アジア(オーストラリア、米国)および日本国内で、2019年6月から2019年11月にかけて実施した。全部で744名の回答が得られた。④ 分析モデルに関しては、第1次調査の⑥と同様である。⑤ 「話す」「書く」「やりとり」

の各項目の困難度と、当該項目が CEFR でどのレベルに位置づけられているかを比較検討し、「話す」「やりとり」に関しては、North(2000)の言語能力記述文のロジット値と順序性を比較する。

(4) 【国外教育機関における Can-do statements との比較】① 国外日本語教育機関に於いては学習者が教室外で日本語に触れる機会が日本国内の日本語教育機関の学習者と比較して少ない。このため、CEFR のような一般的な外部指標とは別に当該教育機関の学習状況に合わせた内部指標としての Can-do statements (Cds と約す) が必要である。そして、内部指標としての Cds と外部指標の CEFR との対応関係を把握することにより、学習者のより一般的な状況でできる (Can-do) ことを予測することが可能になる。② 第 1 次調査および第 2 次調査に際して、中国の A 大学に於いて開発した A-Cds (島田・董,2019) を同時に実施して、A-cds 各項目が CEFR のどのレベルに相当するか、A-Cds と CEFR の言語能力記述文との間で記述内容が類似する項目が同様の困難度を示すか、について検討した。③ 具体的には、第 1 次調査の回答者全員から推定された CEFR 項目の困難度を固定して、A 大学学習者の A-Cds 項目に対する回答と第 1 次調査の CEFR 項目に対する回答を合併した項目応答データから、CEFR 項目と同一尺度上で A-Cds 項目の困難度パラメタを推定した。第 2 次調査に関しても同様の手続きで実施した。

(5) 【日本語学習者を対象とした実験】大隅ほか (2006) は日本語能力を表す能力記述文を作成し、複数の専門家により CEFR のレベル判定を行ったうえで 1068 名の日本語学習者に提示して、自己評価の結果から尺度化を行ったが、特に「読む」を表す 9 項目の言語能力記述文で尺度上の順序性が CEFR と対応しないことを示していた。この結果を踏まえ、18 名の日本語学習者に対して、上記 9 項目を書いたカードを渡し、自分が「難しい」と感じる順に並べるという課題を実施する実験に協力を得た。実験終了後に参加者全員に対して個別にプロトコルインタビューを実施した。

#### 4. 研究成果

(1) 【聴き取り調査(2017 年度)】① CEFR が想定している欧州圏の機関 (イギリス、フランス、ベルギー)、日本語も含む複数の外国語を包括するナショナル・カリキュラムを持つ国の機関 (オーストラリア)、非欧州圏で既に「CEFR 準拠」の言語テストを開発・実施している機関 (中国) で実施した。② その結果、i) 【英国】 CEFR の導入は大学によって温度差がある、欧州言語は CEFR の Can-do statements をそのまま使用しているが中国語と日本語では一部変更して利用している (例えば漢字に関することに加えて、過去形の扱いで欧州言語では A2 だが、中国語や日本語では A1 とする)、【フランス】 中等教育では CEFR の 5 技能に加えて、漢字リストを設定して 6 技能としている、日本語のカリキュラムと CEFR の能力記述文の順序が逆転しているところもある、【ベルギー】 能力記述文は場面や状況に応じて同じものを異なるレベルで使用することがある、漢字語彙を CEFR のグリッドに入れるかどうかは難しく文脈化を考える必要がある、ii) 【オーストラリア】 CEFR で外国語科目のレベルを表示することが全ての外国語に対して義務付けられるようなことはなく、欧州系の言語では実施されているが、日本語では難しく実施されていない、iii) 【中国】 CEFR は言語「共通」参照枠組みであるから、中国語に取り入れる場合にはまず共通性から考え、独自性はその後で考える、HSK2009 では CEFR だけではなく ASSET Languages や ACTFL も参考にした、などの情報が得られた。また、英国の Cambridge Assessment English の Dr. Nick Saville からは、CEFR 自体はいろいろな言語に適用することができる、すなわち、多くの部分は共通であるが、言語間で当然ながら違いもある、それは CEFR が言語の独自性を明らかにするという意義もある、という示唆を得た。

#### (2) 【第 1 次調査(2018 年度)】

① 「聞く」「読む」合計 70 項目の項目間相関係数 (ポリコリック相関係数) を推定し、固有値の減衰状況を見ると、第 I 固有値から順に、41.72, 4.45, 2.96, 2.06, 1.71, 1.12 (以下 1.00 未満) であり、「聞く」「読む」合計 70 項目の一次元性が確認された。

② 各項目のパラメタ推定には、EasyEstimation (<http://irtanalysis.main.jp/>) を用いた。

③ CEFR レベル (A1, A2, B1, B2, C1, C2) を横軸に、項目困難度を縦軸にとり、項目毎に CEFR のレベルと、②で得られた困難度を 図 1 (聞く) と図 2 (読む) に示した。図 1、図 2 とともに、

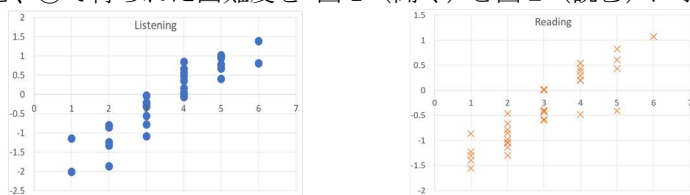


図1「聞く」項目の CEFR レベルと困難度

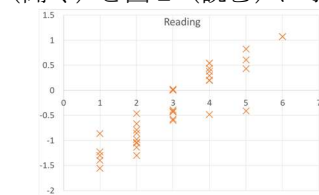


図2「読む」項目の CEFR レベルと困難度

全体として CEFR のレベルが上がるに従って、項目困難度も幅を持ちながらも上がって行く様子が見られる。図 1 と図 2 に関して、横軸の CEFR のレベルを間隔尺度とみなして、「聞く」「読む」の各項目の困難度と CEFR レベルとの相関係数を算出したところ、「聞く」では .916, 「読む」で

は .913 という高い値が得られた。

④ IRT 分析の結果で、i) CEFR のレベルを超えて困難度の順序性が変化した項目は、「聞く」34 項目中 8 項目、「読む」36 項目中 5 項目見られた。ii) 「読む」の 48 「必要に応じて辞書を使えば、どんな種類の手紙やメールでも理解することができる。」で C1 から B1 へ 2 レベルの移動が見られたが、その他の移動項目は隣接レベルへの移動であった。iii) 45 「身近な話題についての定型的な手紙やファックス（照会、注文、確認など）を理解することができる(A2)」、47 「自分の興味のある分野に関連した手紙やメールを読んで、すぐに要点を把握することができる。(B2)」、48 「必要に応じて辞書を使えば、どんな種類の手紙やメールでも理解することができる。(C1)」など、手紙に関係する項目が B1 レベルに集まった。iv) 「読む」の 45 「身近な話題についての定型的な手紙やファックス（照会、注文、確認など）を理解することができる(A2)」が B1 に、56 「簡単なパンフレットや短い説明について、何についてのものかだいたい理解することができる（絵やイラストがあればさらに簡単に把握できる）(A1)」が A2 に移動しているが、これは漢字使用が影響した可能性がある。ただし、中国語母語話者にとっては一般に易しいと考えられる。以上のことから、「聞く」「読む」に関して、目標言語が日本語の場合でも、適用可能な部分も多いが、検討を要する事項もあり、今後、実証的な研究を積み重ねることが必要である。

⑤ North(2000)で「聞く」34 項目中の 20 項目で困難度が Logit 値で示されている。本研究では b\_mean で困難度を示しているため、数値を直接比較することはできないが、数値の項目間の大小関係で困難度の順序性を比較することができる。その結果、難易度の順位が若干異なる項目が見られるが、20 項目でおおむね一致している。10 「場面によって話し方が変わることを理解し、広範囲の慣用表現や口語表現がわかる。」の順位が大きく異なり、目標言語を日本語とした場合の方が難易度が低いことが明らかになった。

⑥以上の結果をまとめると、i) 言語能力記述文の順序性は日本語を目標言語とした場合でも CEFR と一致する部分も多い、ii) しかしながら、IRT 尺度上の位置が大きく動く記述文や、類似した言語活動で CEFR では異なるレベルに属する能力記述文が同一レベルに集まることがある、iii) 目標言語が日本語の場合には、CEFR の言語能力記述文を単に翻訳するだけでなく、日本語に合わせた調整が必要である、ということが明らかになった。詳しくは、野口・大隅・熊谷・島田(2019)を参照されたい。

(3) 【第 2 次調査(2019 年度)】

① 「産出的能力」33 項目と「やりとり」66 項目について個別に項目間相関係数（ポリコリック相関係数）を推定し、固有値の減衰状況を見たものを表 1 と表 2 に示した。例えば、「やりとり」の A 版では第 I 固有値から順に、15.990, 1.596, 0.978, 0.546, 0.441 であり、第 I 固有値と第 II 固有値の比がおよそ 10.0 になることから、「やりとり」A 版では高い次元性を示している。他の 5 つの場合も同様で次元性が確認された。

固有値	表1 産出の固有値			表2 やりとりの固有値		
	A版	B版	C版	A版	B版	C版
$\lambda_1$	20.073	12.736	12.481	15.990	19.695	20.128
$\lambda_2$	1.433	1.364	1.585	1.596	2.111	1.940
$\lambda_3$	0.767	0.925	0.631	0.978	0.896	1.070
$\lambda_4$	0.694	0.556	0.466	0.546	0.767	1.019
$\lambda_5$	0.592	0.512	0.418	0.441	0.712	0.684

② 各項目のパラメタ推定には、EasyEstimation (<http://irtanalysis.main.jp/>) を用いた。

③ CEFR レベル (A1, A2, B1, B2, C1, C2) を横軸に、項目困難度を縦軸にとり、項目毎に CEFR のレベルと、②で得られた困難度を図 3 (話す)、図 4 (書く)、図 5 (やりとり) に示した。

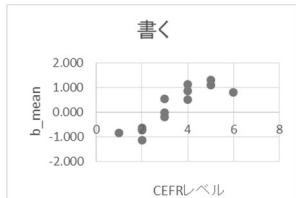


図 3 CEFR レベルと困難度(話す)

図 4 同 (書く)

図 5 同 (やりとり)

図 3、図 4 では、全体として CEFR のレベルが上がると従って、項目困難度もレベル毎に幅を持ちながら、レベル間で重なりを持ちながらも、項目困難度が上がって行く様子が見られるが、C2 項目が少ないこともあって、C2 項目で C1 項目より困難度が低くなっている。図 3 では、A2、B1、B2 では相互に重なりを持ちながらも項目困難度が上がって行く様子が見られるが、C1、C2 は各 1 項目と項目数が少ないこともあり、B2 項目の幅の中に収まっている。A1 項目は幅が大きく、A2、B1 項目をカバーし、さらに B2 項目の下半分までをカバーしている。図 3、図 4、図 5 に関して、横軸の CEFR のレベルを間隔尺度とみなして、「話す」「書く」「やりとり」の各項目の困難度と CEFR レベルとの相関係数を算出したところ、「話す」で .822、「書く」で .879、「やりとり」で .658 であった。「聞く」の .916、「読む」の .913 と比べてやや低く、特に、「やりとり」では中程度の相関しか示していない。

④ IRT 分析の結果で、i) 産出 (話す・書く) では、推定された項目困難度の順序は元の CEFR



の順序と全体としては一致する部分も少なくないが、「話す」では、97「本や映画の筋を順序だてて話し、それに対する自分の考えを述べることができる。(B1)」が B2 レベルに上がる、96「予測不能の出来事(例えば事故など)を順序だてて詳細に述べるができる。(B1)」が C1 レベルに上がる、89「明瞭で滞りなく、詳しく、多くは記憶に残るような経験談ができる。(C2)」が B2 レベルに下がる、などの変化が「書く」では、160「エッセイやレポートを書く時に、根拠を提示しながら、ある視点に賛成や反対の理由を挙げ、さまざまな選択肢の利点と不利な点を説明できる。(B2)」が C2(C1)レベルの項目群の中に入る、164「日常的な事実を述べ、行動の理由を説明するために、きわめて短い報告文を標準的な常用形式に沿って書くことができる。(B1)」が B2 レベルに上がる、140「明瞭ですらすらと流れるように、そのジャンルに適切な文体で書き、読み手を完全に引き込むことができる。(C2)」が C1(B2)に下がる、などの変化が見られた。ii) 「やりとり」では、元の CEFR の A1 項目群と A2 項目群に、A2 項目群と B1 項目群に難易度の重なりがあり、A1 項目と B1 項目とで難易度の極めて近接した 2 項目があるなど、項目の順序性に関して CEFR と本研究の結果との間で、弱い一致性が見られた。項目の難易度が言語に加え、相互コミュニケーションに関する習慣の違いなど社会文化的要因が影響する可能性など「言語」以外の要因についても精査する必要性が窺われた。

iii) 以上のことから、CEFR を日本語に適用する場合、単に翻訳するだけではなく、日本語に合わせて調整する必要性が示唆された。

⑤ North(2000)で「話す」20 項目中の 15 項目で、「やりとり」66 項目中 49 項目で困難度が Logit 値で示されている。数値を直接比較することはできないが、数値の大小関係で困難度の順序性を比較することができる。「話す」では難易度順位が若干異なる項目が見られるが、15 項目中 12 項目(80.0%)で一致している。これに対して「やりとり」では、49 項目中 17 項目(34.6%)で困難度の順位に大きな変化がみられる。284「身近な日常的作業について情報ある程度まで交換できる」、286「地図や図面を参照しながら目的地を聞いたり、答えたりすることができる」、314「短い簡単な葉書を書くことができる」で特に困難度が高くなり、199「好き嫌いを言うことができる」、192「挨拶、別れ、紹介、感謝などの社会的関係を確立することができる」、197「挨拶をするのに簡単な日常の丁寧な形式を使うことができる」、194「興味のある話題の日常的なことなら短い会話に参加できる」で困難度が特に低くなっている。

全体として、日本語を目標言語とした場合に、CEFR の産出的言語能力尺度(「話す」に限定されるが)は小さな修正でおおむね適用できるが、「やりとり」尺度に関しては文言の修正や項目の差し替えなど日本語に合わせた修正が必要である。

⑥ 以上の結果をまとめると、日本語を目標言語とした場合に、CEFR の産出的言語能力尺度(「話す」に限定されるが)は小さな修正でおおむね適用できるが、「やりとり」に関しては文言の修正や項目の差し替えなど日本語に合わせた修正が必要である。

詳しくは、野口・大隅・熊谷・島田(2020)を参照されたい。

#### (4) 【国外教育機関における Can-do statements との比較】

① 「聞く」では概ね、1 年生の A-Cds 項目は A2 レベルの CEFR-Cds 項目と同等の困難度であり、2 年生の項目は A2 から B1 レベル、3 年生の項目は B1 から B2、4 年生の項目は C1 レベルであり、「読む」では概ね、2 年生の A-Cds 項目は A2 レベル、3 年生の項目は B1 から B2、4 年生の項目は C1 から C2 レベルと言える。

② 今後「産出技能」についても同様の分析を実施するが、このような研究は日本語教育分野において初の試みである。今回、この手法の有効性が確認でき、今後の応用研究が期待できる。詳しくは、島田・大隅・熊谷・董・野口(2020)を参照されたい。

#### (5) 【日本語学習者を対象とした実験】

実験の結果、日本語において、能力記述文の困難度が CEFR レベルと逆転する例が大隅他(2006)同様に複数見られた。またその原因については、プロトコルインタビューの結果から、学習者の母語により、「漢字」や「外来語」などの言語知識が、理解促進の要因もしくは理解の壁となっている場合が見られた。本実験の結果から、CEFR をそのまま日本語に適用することには十分な検討が必要であることが示唆された。

#### 今後の課題

本研究では、CEFR の「聞く」「読む」と「話す」「書く」「やりとり」能力について分けて検討したが、今後これらの結果を統合して、CEFR を日本語に適用するために必要な調整事項や補助尺度、特に日本語の独自性を示す記述文の開発や漢字能力をどのように取り入れて行くかなどの検討が課題となる。さらに、CEFR-CV(Council of Europe, 2018)でのレベル数拡張や mediation(仲介・架橋)尺度の導入など新しい視点に関しても検討を進める必要がある。

#### <引用文献>

North, B. (2000). *The development of a common framework scale of language proficiency*. Peter Lang.

大隅敦子ほか(2006). 日本語能力試験 Can-do-statements と CEFR-Dialang との対応付けの試み, 5<sup>th</sup> International J-OPI-Symposium Berlin.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 島田めぐみ	4. 巻 学術論文集2018
2. 論文標題 Can-do statements はいかにテスト・評価に活用できるか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日語教学と測評研究	6. 最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島田めぐみ	4. 巻 21
2. 論文標題 日本語教育におけるCan-do statements研究の現状と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 島田めぐみ, 保坂敏子, 澁川晶, 孫媛, 谷部弘子	4. 巻 22
2. 論文標題 日本語聴解テスト予備試験結果の分析--認知診断テストの開発を目指して--	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東アジア日本語教育・日本文化研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野口裕之	4. 巻 2
2. 論文標題 IRTとCBTの光と影 高大接続改革の夢か現か幻か	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属高大接続センター紀要	6. 最初と最後の頁 29-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野口裕之	4. 巻 57
2. 論文標題 学力の評価と測定をめぐるー学力の評価と測定とその周辺の話題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 226 - 229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 葦原恭子・奥山貴之・塩谷由美子・島田めぐみ	4. 巻 1
2. 論文標題 高度外国人材に求められるビジネス日本語フレームワークの構築 直観的手法を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 琉球大学国際教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 島田めぐみ・大隅敦子・熊谷龍一・董博・野口裕之
2. 発表標題 国外日本語教育機関におけるCan-do statementsとCEFR能力記述文の間の項目困難度比較 受容技能を例に
3. 学会等名 2020年度日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野口裕之・大隅敦子・熊谷龍一・島田めぐみ
2. 発表標題 CEFRの日本語への適用可能性ー産出的言語活動および (言葉の) やりとりの場合ー
3. 学会等名 日本語教育学会2020年度春季大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 章原恭子・塩谷由美子・島田めぐみ・奥山貴之・野口裕之
2. 発表標題 高度外国人材に求められる「仲介」スキルとは - CEFR2018補遺版におけるmediationの分析を通して -
3. 学会等名 沖縄県日本語教育研究会第17回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野口裕之
2. 発表標題 ラッシュ系モデルによる尺度構成 - 作文研究およびCEFR尺度の開発
3. 学会等名 作文研究2018 (科学研究費補助金成果発表会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野口裕之・大隅敦子・熊谷龍一・島田めぐみ
2. 発表標題 CEFRの日本語への適用可能性－受容的能力の場合－
3. 学会等名 日本テスト学会第17回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島田めぐみ・孫媛・谷部弘子・保坂敏子・澁川晶
2. 発表標題 日本語認知診断テストの開発 - 聴解テストを例に -
3. 学会等名 日本テスト学会第17回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 大隅敦子・中村健太郎
2. 発表標題 「日本語能力試験 合格者と専門家の評価によるレベル別Can-doリスト」の作成について
3. 学会等名 日本テスト学会第17回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島田めぐみ・董博
2. 発表標題 中国の日本語教育機関におけるCan-do statementsフレームワーク（読む，聞く）の構築
3. 学会等名 東アジア日本語教育日本文化研究学会2019年度国際学術発表大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島田めぐみ・孫媛・保坂敏子・澁川晶・谷部弘子
2. 発表標題 日本語聴解認知診断テスト開発のための予備調査
3. 学会等名 日本言語テスト学会第22回（2019年度）全国研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊谷龍一・野口裕之
2. 発表標題 複数冊子における素点を用いたDIF検出方法について - CEFR descriptors質問紙を用いた検討 -
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野口裕之
2. 発表標題 評定値の分析
3. 学会等名 作文評価を考えるセミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澁川晶・谷部弘子・島田めぐみ・保坂敏子・孫媛
2. 発表標題 回顧的口頭報告による聴解テスト項目の検証
3. 学会等名 日本語教育学会2019年度秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 島田めぐみ
2. 発表標題 Can-do statementsはいかにテスト・評価に活用できるか
3. 学会等名 第一回中国大学教育機関における日本語教育と日本語テスト国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島田めぐみ・谷部弘子・孫媛・保坂敏子・澁川晶
2. 発表標題 真正性の高い日本語聴解テストの開発
3. 学会等名 The 2018 International Conference on Japanese Language Education Venezia ICJLE 2018（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島田めぐみ
2. 発表標題 評価研究の方法論的視点：データ科学としてのテスト研究
3. 学会等名 2018年度日本語教育学会春季大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 櫻井千穂・真嶋潤子・中島和子・野口裕之
2. 発表標題 DLA<読む>の構成概念妥当性の検証 テキストレベルの順位性をめぐって
3. 学会等名 2018年度日本語教育学会春季大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊谷龍一・岩田 昇・佐伯いずみ
2. 発表標題 複数評定者データのDIF分析に関する方法的検討
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊谷龍一
2. 発表標題 項目反応理論入門
3. 学会等名 第13回ICPSR国内利用協議会・統計セミナー（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊谷龍一
2. 発表標題 EasyEstimationを用いたテストデータのIRT分析
3. 学会等名 第12回『日本テスト学会賞』記念講演・ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大隅敦子
2. 発表標題 「CEFR（欧州言語共通参照枠）尺度」を日本語に適用する場合の能力記述文の順序性に関する研究
3. 学会等名 第2言語習得研究会（関東）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 島田めぐみ
2. 発表標題 Can-do statementsはいかにテスト・評価に活用できるか
3. 学会等名 第一回中国大学教育機関における日本語教育と日本語テスト国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊集院郁子・李在鎬・野口裕之・小森和子・奥切恵
2. 発表標題 IRT系モデルとReadabilityによる日本語作文の定量的分析—大学教員による評価とコンピュータによる自動評価の比較
3. 学会等名 2017年度日本語教育学会秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 登藤直弥・新井紀子・菅原真吾・尾崎幸謙・犬塚美輪・新井庭子・分寺杏介・野口裕之（指定討論）
2. 発表標題 リーディングスキルテスト（RST）- その教育測定的性質と教育実践に対する示唆
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 遠藤織枝・岩田一成・金田智子・小柳かおる・島田めぐみ・福田倫子・本田弘之・谷部弘子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 260
3. 書名 新・日本語教育を学ぶ - なぜ、なにを、どう教えるか -	

1. 著者名 島田めぐみ・野口裕之	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 154
3. 書名 日本語教育のためのはじめての統計分析	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	島田 めぐみ  (Shimada Megumi)  (50302906)	日本大学・大学院総合社会情報研究科・教授   (32665)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	熊谷 龍一  (Kumagai Ryuichi)  (60422622)	東北大学・教育学研究科・准教授    (11301)	
研究 協 力 者	大隅 敦子  (Osumi Atsuko)	国際交流基金・日本語試験センター・主任研究員	